

国立大学法人
宮城教育大学

震災により再確認された『つながり』。

2011年を表す漢字も『絆』でした。

震災以降、私たちのつながりや絆は

どのように変化したのでしょうか。

これらをキーワードに、コミュニケーション論の専門家である

宮城教育大学教育学部の菅野仁先生にお話を伺いました。



変わり始めた 人と人とのつながり

かつては“当たり前”の
結婚、出産、子育てが
“選択”の時代に

■ 選択的つながり

東日本大震災以降、やはり人々のつながりには大きな変化があったと感じます。明治以降の近代、戦前、戦後、高度経済成長期、バブル期とこれまでの日本は、地域社会や“ムラ”社会を解体してきました。社会学の分野には『個人化』という言葉がありますが、人々の個人化がバブル崩壊後も続いてきたんです。地域も家族もみんなバラバラで、自分は自分、お金さえあれば一人で生きて行ける、そういった感覚や価値観が長く根付いていました。

しかし、人と人とのつながりが、震災をきっかけにもう一度見直される傾向にあるのではないのでしょうか。この傾向は今の社会状況を考えれば、今後もずっと続いていくものだと思いますね。

私自身は日本社会での個人化はすでに行きつくところまで行った、と考えてい

るんです。たとえば高齢者の方々が血縁がなくても自分たちで“縁”を作っていく。あるいは結婚や出産についてもそうです。かつては結婚も出産も一定の年齢を迎えれば当たり前のこと。お見合いというシステムや子作りにしても、当然のように周囲の人々が支えてきました。

それが今は“選択”になっています。結婚に対する意識、子どもを作る、育てることが当たり前ではなく、一人で生きて行こうと考える人がいたり、新しい家族を作らないにしても、なんとか新しいつながりを作りたい、あるいは今いる家族を大切にしたいといった“選択的つながり”に変わってきています。

これまでは地域社会という家族の中に埋め込まれていました。比喻的に言えば“おにぎり”ですね。昔は粒の集まりがなんとなく一つに固まっているという状態。でも今は、昔のおにぎり違って一粒一粒がしっかり見える。つまり、みんなの顔がよく見える、その上で結びつこうとしている。そういうつながり方なのではないでしょうか。

ですからこれからは、ある程度の個人化を持ちながらも、つながりを選択して、程良い距離で交流する、そのような新しい形のつながりが模索されるのではないかと思いますね。

■ 自分自身のケア

読者のお母さん方は震災で大変なご苦労をなさったと思います。私から言えることは、決して悩みを一人で抱え込まないということ。お母さんの心の安定は子育てにとってプラスだということを実感してほしいですね。

社会学では『存在承認』という言葉があります。0～3歳児くらいの子どもは存在そのものを認めることが大切になってきます。そこにいてただあなたは素晴らしいと、抱っこや声掛けでもいいので伝えてあげようとしていただきたい。そして、それができるようになるためには、自分に余裕がなければなりません。自分の心身をきちんと“ケア”する。これが重要です。

私自身2人の子どもがいて、育児には積極的に協力してきたつもりです。妻はどう思っているかわかりませんが(笑)。たとえば夜泣きの時、役に立たなくても妻と一緒に右往左往する、手伝う。そうして寄り添うことが、お母さん方のケアにつながるのではないかなと思うんですね。

男性はわりと合理的で、「俺は外で働くのが役割だから」とか「俺は役に立たないから」と言いがちですが、決してそうではない。奥さんが困っているなら一言声をかける、寄り添う。それだけでもお母さん方の気持ちは全然違いますよね。それをお父さん方に伝えたいです。私はそう考えていますが、いかがでしょうか(笑)。

■ 関係の豊かさ

お母さん方には「ママ友」という友達関係がありますよね。これはすごく難しいなと思うんです。

友達には二重性があります。頼りになる、安心できる存在である、それと同時にライバルでもあるんですね。それを頭の片隅に置いてうまく関係を築くことが大事だと思います。この人とは分かり合える、信頼できるとしても100%依存しない慎重さ、関係は作っても相手の価値

観にのめりこまないようにすることが時には必要なのではないでしょうか。

あるいは男性的な価値観を取り入れる、というのでもいいかもしれません。社会的経験、社会的に幅が広いお父さん方は「そんなことにとらわれても仕方ないじゃないか」という考え方ができると思うんです。子育て中のお母さんは視界が狭く、今いる場所が絶対的と感じてしまいがちです。ですから「〇〇ちゃんに比べてうちの子はしゃべりが遅い」「うちの子はお稽古ごとを何もしていない」と、そういう考えに陥ってしまうんですね。ですからご主人と話しをするというのはやっぱり大事だと思います。

夫婦や家族と話し合うのはとても難しいこと。会議やミーティングと違って「さあ始めましょう！」という風にはなかなかいきません。ですから話し合うためには時間を共有する、これが良いのではないのでしょうか。たとえば洗濯物を干す、たたむ、そういうちょっとした時間を使って話し合ってみてはいかがでしょうか。

家族は個々に「役割」を帯びています。でもその役割だけに専念してはいけません。相手を気遣う、つまり前述の“ケア”の精神が大切になってきます。

お金があれば何でも得られる時代にはもう限界が見えてきました。これからの“幸福のアイテム”には、物質的豊かさと精神的豊かさ、さらに“関係の豊かさ”が加わっていきたくらうと私は考えています。それを得るためには何が必要か。ケアの精神から生まれる“つながりの豊かさ”です。これを持っている人こそが、これからの時代、幸せになれるのではないかと思います。

”
これからの時代の
幸福のアイテムは“は”つながりの豊かさ

宮城教育大学教育学部 教授
菅野 仁 先生

仙台市生まれ。専門は社会学思想史・コミュニケーション論。東北大学文学部助手、青森公立大学経営経済学部助教授、宮城教育大学教育学部助教授などを経て、2006年より同大学教育学部教授。「コミュニケーション不全」「センシティブな自我」といったキーワードを手がかりに考察を深めている。著書に『教育幻想—クルティヤーチャ宣言』(2010年・ちくまプリマー新書)『友だち幻想—人と人の(つながり)を考える』(2008年、同上)などがある。2児の父。